

安陽殷墟YH一二七坑の発掘

—出土甲骨の受難—

成家徹郎

発掘状況

一二七坑出土の甲骨は、その発掘状況から尋常ではなかった。そして発掘のあとも受難が続いた。この発掘作業は、起重機など文明の利器がない状況下で行われた。

一九二七年五月、広州・中山大学に中央研究院設立準備会が発足した。そして一九二八年四月に正式に成立した。初代院長に蔡元培が選ばれた。この時期また、歴史語言研究所設立準備会も発足した。そして七月に正式に成立した。所長は傅斯年である。八月に董作賓を、発掘の準備作業として安陽に派遣し調査させた。以後、董作賓が発掘活動および出土甲骨の研究において中心人物となる。董作賓は発掘や考古学に関してまったくの素人であったが、選ばれた事情について李濟はこう述べた。

所長傅は、二つの単純な理由で、董を予備的な調査に安陽に派遣した。その理由の第一は、董は河南の出身者なので、その出身が彼の仕事に種々様々に役立つであろう。第二に伝統的な意味においては、古物学者ではなかったが、彼は知的に機敏であったからである。(李濟『安陽発掘』一八〇頁)

以下、発掘状況については主に下記文献によって述べる。

石璋如『遺址の発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』(十三次至十五次出土甲骨)

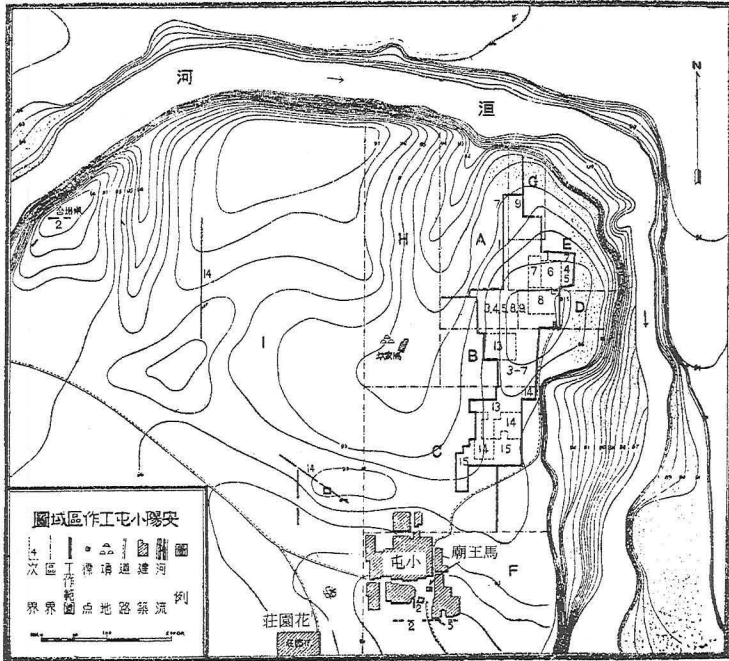


図1. 安陽殷墟・中央研究院発掘地図
 「殷墟最近之重要発現、付論荅小屯地層」
 【中国考古学報】第二冊第4頁

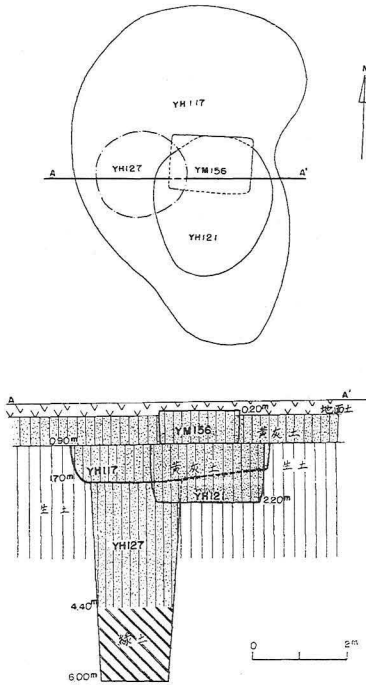
第一次発掘は一九二八年十月に行われた。以後、一九三五年までに十二回の発掘が続いた。そして一九三六年三月に第十三次発掘が開始された。図一、安陽殷墟・中央研究院発掘地図（石璋如「殷墟最近之重要発現、付論荅小屯地層」【中国考古学報】第二冊）

殷墟の発掘活動は、第九次からは洹河の北側に移った。そこで続けて四次発掘した後、一九三六年の春に発掘隊をまた洹河の南に移動させ、小屯の未発掘の地域を継続して発掘することにした。今回の発掘の目標は殷代の建築遺構を見つけ出し、その組織の系統と配列の状況を明らかにすることであった。発掘隊の隊員は郭宝鈞、石璋如、李景聃、祁延霽、王湘、高去尋、尹煥章、潘愨および技工の魏善臣等で、郭宝鈞の指揮の下で発掘活動を行った。同時に、中央古物保管委員会監察委員の王作賓、河南省政府から派遣された孫文青も部分的に参加した。発掘隊の臨時作業所を安陽東駅の西方、高樓莊村内に設置した。第三区行政督察專員公署は保安隊十余名を派

遣して保護の任に当たった。五日間の準備を経て三月十八日に正式に発掘作業を始めた。活動計画は南京ですでに決定していたように一千六百平方メートルを一つの発掘単位とした。各単位の中央に平板儀を一台および応用儀器などを設置し、発掘隊隊員二名と作業員四十名をもって、これまでと同様「平翻」方式（組織的じゅうたん捲き方式）を実施した。また百平方メートルを一つの小単位として、従来の坑位の制限を打破した。何かを発見したらその都度測定し全体図面に書き入れる。こうすれば発掘作業が完了した時には、総図もまた完成する。こうすれば従来の、部分図をつなぎ合わせる作業は必要なくなる。

要するに、この第十三次発掘は方法の面でも組織の面でも従来と異なるところがあった。発掘地域はB、Cの二区に限った。三月十八日より始め、六月二十四日で終了した。三ヶ月と六日を費やした。今回の発掘活動は一つの新しい計画の実験であったので、発掘作業の進行中に重作費がわざわざ南京から安陽に来て、改善すべき点を考え、また今回出遭った新しい現象について検討した。

図2. YH一二七坑の層位関係および地中の状況。
 『遺址の発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』



本来の計画では、六月十二日をもって終了であった。ところが十二日の午後四時にYH一二七坑でたくさんの亀甲版を発見した。YH一二七坑は、C区の乙十二基址の西十数メートルのところである。（図二）YH一二七坑の層位関係および地中の状



図3. YH一二七坑坑内の甲骨埋蔵状況
『遺址的発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』

況。『遺址的発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』

もと、隊員は五時半で作業を終了することになっていた。この一時間半の時間内で一立方メートルの半分ほどの体積の土中から三千七百六十枚の亀甲版を掘り出した。これは相当の数量と言える。しかしまだどれだけあるのか全く分からない。そこで特にこの一坑のために翌日一日を当て、一日かけて甲骨の状況を調査することにした。実際調査してみると全く彼らの想像を超えていた。彼らの希望をはるかにしのぐ量であったので喜びはこの上なく大きかった。この坑は、考古発掘の経験と技術が最も豊富な王湘が発見したものである。石璋如（報告書の著者）は王氏と一緒に亀甲を剥ぎ取る作業を一日中行った。しかしやっと一層を清理しただけだった。坑の直径は二メートルもなかったので（図三、YH一二七坑坑内の甲骨。『遺址的発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』）、坑中に同時には二人しかはい

れなかった。一日に一つの層を清理できるだけである。これでも最も速い作業効率であった。

この時期はまさに六月中旬で、気候は非常に暑く、掘り出されたばかりの脆弱な亀甲版はどうして厳しい灼熱に耐えることができようか。しかも亀甲層は相当深く堆積しているから、急いでやって短い期間でやり終えることができるわけがなかった。特に夜間は治安上の心配が大きかった。そこで方針を変えることにした。

甲骨の堆積（甲骨のかたまり）をそのまま坑から取

り出す大作戦

一方では発掘の作業を速やかに進め、また一方では木工職人を雇って木板で大きな箱を作ってもらうことにした。職人は状況を見て、これだけ重いものを運搬するのだから木板の厚さはどうしても二寸（七センチメートル）以上でなくては耐えられないだろうと判断した。厚く積み重なった甲骨の堆積は、さらさらの灰土に包まれていて、海綿のように脆い。しかも亀甲版は長い年月を経て脆弱になっていて、不用意に手を触れると壊れてしまいそうであった。そこで、厚い堆積そのままに箱に入れて運搬する方法が最も安全で適切であると判断した。このため、亀甲版堆積の周囲を土を取り除いて深く掘り進め、坑の底と思われるところまで掘った。この時、灰土に包まれている亀甲版堆積

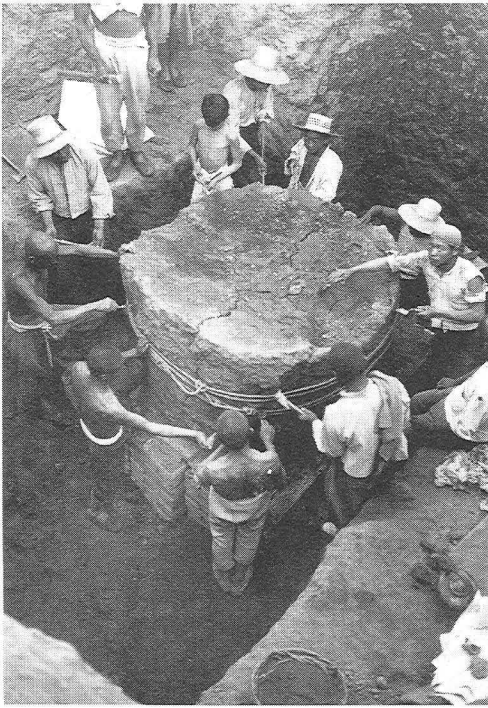


図4. 甲骨堆積の「灰土柱」。
〔遺址的発現と発掘・丁編・甲骨坑層之二・〕

は巨大な柱のように見えたので、報告書は「灰土柱」と呼んでいる。この灰土柱の高さは一メートルをはるかに越えていた。（図四・甲骨堆積の「灰土柱」）

まず、これを木箱に入れる作業は相当やっかいだった。木箱の底板を、堆積の下に入れる作業から始めた。灰土柱の下方、亀甲版がもう無いと思われるところに、南北両方向から五十センチ四方の孔を掘り進め貫通させた。この孔に厚い板を入れ、この板の下にレンガを敷いた。次にこの中央

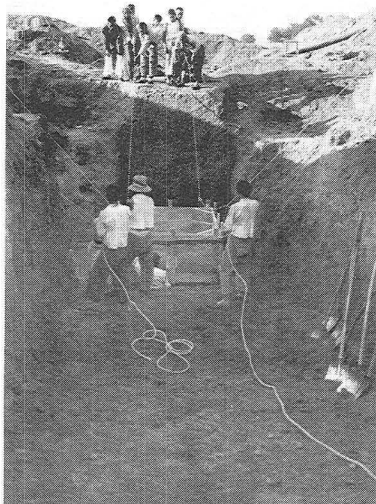


図5. 木製の枠を空中から下ろす作業
 『遺址的発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』

孔の左側、右側にも同様のやり方で順次板を入れてレンガを敷く作業を実施した。ただし、この場合、灰土柱が崩れる恐れがあったので、灰土柱の側面に太い縄を幾重にも巻きつけて補強した。この作業が完了して木箱の底が出来上がったことになる。このとき別の職人十人は木箱の側面となる枠を準備していた。灰土柱の側面に実際に板を当ててみて、寸法を決めた。

先に地表で四つの側面を組み立てて、木箱の枠を作製した。枠の四方に丈夫な綱をつないで、大勢の工夫に引っ張ってもらって、枠をまず灰土柱の真上まで移動させた。枠は灰土柱の上方で宙に浮いているかたちになった。この作業を指揮した人は、以前鉄道工事で力量を発揮したことがある張福来であった。綱を引く工夫たちに灰土柱は見えない。みな張福来の掛け声に従って作業をするのである。うっかりしくじっては、亀甲板を破壊してしまう。特に、灰土柱のちょうど真上に持つてきて、ゆっくりと降ろしていく作業は本当に緊張が極度に張りつめた。張福来の掛け声はひときわ大きく遠方まで響き渡った。(図五. 木製の枠を空

中から下ろす作業

この発見は、殷墟で発掘を開始して以来まったく初めてのことだったので、考古組主任の李済もわざわざ南京から現場にかけて作業の指導に当たった。ただ、李済が南京から安陽に到着して、作業現場に駆けつけたのは、緊張した、また壮観な光景でもあったこの作業が終了した後であった。

木箱と亀甲板が直接接触するのでは、運搬の途中で亀甲



図6. 甲骨堆積が入った大木箱を地上に引き上げる作業
 『遺址的発現与発掘・丁編・甲骨坑層之二』

版をいためる恐れがあるので、木箱を少し大きめに作り、木箱と亀甲骨堆積の間の隙間に灰土をびっしり詰めた。亀甲骨堆積を収めた木箱は、このために体積と重量がかなり増加し、この後の運搬の作業は一層困難を極めることになった。(重量は数トンに達した、と思われる)結局、箱の大きさは高さ一メートル、幅は一・七メートルになった。この作業の間、関係者は全員この坑のそばに野営し、まるまる四日間を費やした。

六月十七日

次は、この大木箱を地表の高さまで引き上げる作業である。坑の北側に、木箱の底の深さのところから、地表まで達する斜面の道を作った。道幅は三メートルで、傾斜は三十度、長さ十二メートルになった。(古代大墓の墓道に似ている)木箱の前面(北側)に綱をつないで、引つ張る準備をする。木箱の後方(南側)に丈夫な横棒を着け、綱でしばってしっかり固定する。こうしてから、木箱の底板の下に敷いてあるレンガの北側の分をゆっくりと取り除いた。大木箱は当然、北側に傾く。木箱の後方にしばり着けた横棒を大勢の人夫が押さえて、ゆっくり押しながら、木箱を上下転倒させた。よつてもとの底板が上面つまり蓋になった。それから、鉄製の帯を木箱に巻きつけ、釘を打ちつけて頑丈にした。

午後から、大木箱を地表まで引き上げる作業を開始した。(図六、甲骨堆積が入った大木箱を地上に引き上げる作業)

まず木箱の前面(北側)に鉄製のレールを二本敷いた。また木箱を引つ張るために、この前面に綱を三本結びつけた。そして木箱の後面には力のある

人夫が数人、鉄製の棒を使って「てこ」の原理で前面に押す作業を受け持った。この時も作業を指揮した人は張福来であった。彼の掛け声で調子を合わせて、作業を進めた。しかし午後一杯を費やしたにもかかわらず、わずかに一メートル進んだだけだった。うまくいかなかった主な原因は、レールの下に枕木を置かなかつたためであった。そこは土が柔らかいところだったので、重い木箱は安定感がなく左右に大きく揺れて、しかもレールと共に木箱も土の中にめり込んでしまった。こんな状態で日は暮れた。ただ、ともかく斜面の通路の入り口（一番下方）まで運んで来たので、一応ひと安心である。

この時、南京から電報が届いて、李済は夜半に安陽を離れた。作業員数名を見張りとして残して、他はみな作業小屋に帰って就寝した。

六月十八日

斜面の通路の北側に杭を二本打ち込んだ（通路の両側）。そしてこの北側に太い横棒を置いた。（引つ張る綱を引つ掛けるためのもの）

この横棒の両端にそれぞれ短い棒を三本しばり付けて（短い棒の両端が、太い横棒から出るように）、歯車の歯のように作った。（歯が六つの歯車になる）大木箱の前面に、引つ張るための綱四本をつないだ。そして「綱引き」の要領で引つ張り、それを太い横棒に巻きつけた。これによって大木箱がすべり落ちることなく安定停止させる役割りを果たす。通路には、枕木を置いてから鉄製のレールを二本敷いた。後面（下方）では木箱の左右にそれぞれ人夫が居て、「ころ」を転動して上に押した。また、休憩する時は木箱の後面に杭を二本打ちこみ、これに板を横に置いて木箱がすべり下りるのを防止した。こういう作業を続けて、午後三時に、通路の地表の入り口のところまで引き上げること成功した。ここでみな一息ついた。この作業もやはり張福来が指揮した。

出土地から鉄道の安陽駅まで運ぶ作業も決して容易ではなかった。(数キロメートルある)今の世ならクレーンとトラックを使えば何の苦も無い。しかし当時の状況は相当違っていた。片田舎であった安陽に、近代の機械の類は何もなかった。また、出土地のあたり一帯は農地であり、主に綿花と麦が植えられていた。したがって、道は狭いあぜ道しかない。

六月十九日

大雨だったのでまる一日、作業を休んだ。

六月二十日

灰土柱を運び去った後、このYH一二七坑の底を調査した。さらに一メートル掘り下げたところで、この坑の底に当たった。作業の過程で陶器の破片が少し見つかっただけだった。これによって、この坑の全体的規模が判明した。坑は円形で直径は一・八メートル。坑の口は地表から一・七メートルのところにあり、坑の深さは四・三メートルあった。坑内の上層五十センチは灰土層で、この下が甲骨堆積層で、一・六メートルもあった。甲骨層は北が高く南が低く傾いていた。上層の甲骨を少し取り出したところで一人の人の骨が現れた。北壁に寄ったところに、頭部を北向きにして、背を丸めた状態で埋められていた。おそらく当時、甲骨を管理していた人であったと思われる。

一二七坑は特別に大きい発見だったので、これまでの作業に参加した人夫たちに報奨金を支給した。

六月二十一日

安陽駅まで運搬する方法について協議した。

六月二十二日

大木箱を運ぶ作業だが、最初、棺を運ぶ職人に依頼した。まず、担ぎ棒を付ける。木箱の上に太い棒を二本平行に

結びつけて、それにさらに短い棒をたくさん付けて、大勢で担げるようにした。しかし実際に六十四人の人夫で担ごうとしたが、大木箱はほとんど動かなかった。そこで、木箱の蓋（もとは底板）を開けて土を取り出して、木箱の上部十センチメートルを切り落とした。そしてまた蓋を釘で打ち付けた。これで少し軽くなった。また、担ぎ方についても工夫することにした。

六月二十三日

今度は太い棒を、木箱の中央で交差するように十字形に取り付けた。そして大勢の人夫で担げるように、さらに短い棒をたくさん太い棒にとりつけ、人夫の配置を工夫した。これを六十人から七十人の人夫で担いだところ、うまくいった。ただ、担ぎ棒が十字形になるので、広い通路が必要になる。このあたりはそんな広い通路はない。どうしても綿花畑や麦畑を通らなくてはならない。しかし農作物に被害を与えたら当然補償しなくてはならない。ただ幸いなことに、麦は刈り取った後であったし、綿花はまだ苗の段階だった。そこで、担ぐ方法とレールを敷いて引張る方法を併用して、作物にほとんど害を及ぼすことなく運搬することができた。レールを敷く方法は、苗に害を与えないために有効な方法であった。この日は薛家莊南地まで運搬した。

六月二十四日

朝早くから行動を開始し、綿花畑と麦畑を無事に通過した。安陽駅まで運搬した時すでに夕方の七時で、あたりは暗くなりかけていた。

六月二十五日～七月二日

大雨で活動は停止の状態が続いた。

七月三日

空は晴れたので、貨車に積み込む作業を始めた。ところが木箱は大きすぎて貨車の入り口から中に入っていけない。そこでまた木箱を少し切り落としてから積み込んだ。

七月四日

亀甲版堆積の入った大木箱を載せた貨車は安陽を発車した。

七月十二日

無事南京に着いた。最初、史語所図書館の大広間に運び入れた。その後歴史語言研究所の広間に移し、室内発掘が始まった。(図七 甲骨の堆積。地中にあった時と反転して、下面が上になっている。)(図八 室内発掘の状況。左から徐祿、魏善臣、関徳儒。『當甲骨遇上考古』史語所は、当時南京市の北極閣山ふもとにあった。いま中国科学院南京古生物研究所になっている。)(図九 南京の中央研究院歴史語言研究所。筆者撮影)

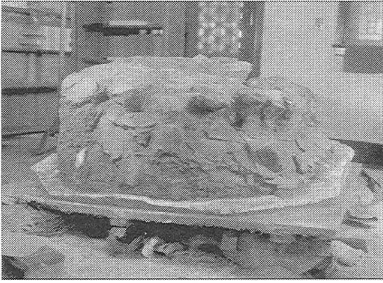


図7. 甲骨の堆積
(地中にあった時と反転して、下面が上になっている。)
(『當甲骨遇上考古』)



図8. 室内発掘の状況。
左から徐祿、魏善臣、関徳儒
(『當甲骨遇上考古』)

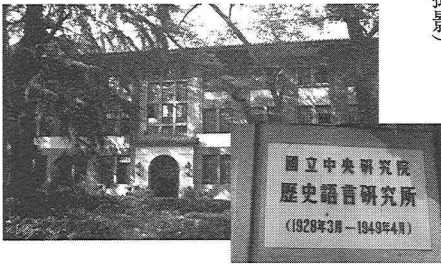


図9. 南京の中央研究院歴史語言研究所
(筆者撮影)

南京で大木箱をトラックから下ろす時の状況は、下記文献に詳しい。

張政娘「我在史語所的十年」(一二七坑甲骨)『新學術之路・下』

胡厚宣「紀念殷墟甲骨文發現90周年、想到127坑」『文物天地』一九八九年六期

筆者(成家)は一九九七年十月に、南京で開催された天文関係の国際会議に参加した際に、この歴史語言研究所を見学した。最初、一人で行ったところ、入り口の門には警備員(あるいは警官)が立っていて、関係者以外は立ち入り禁止だと言われた。この古生物研究所は中国科学院に属する機関なので、おなじく中国科学院に属する紫金山天文台の知人に紹介してもらってやっと見学が可能となった。南京には国民党政府関係の建物がいまでもたくさん残っているが、みな嚴重に監視されているようだ。

一九九一年に殷墟花園莊東地で甲骨が発見された。この時も厚い甲骨層を成していた。そして、ていねいに一枚一枚取り出す作業をゆるすほどの時間的ゆとりがなかった。この時、発掘者は、一二七坑の発掘例を思い起こして、これにならって甲骨を堆積のまま屋内に運び入れた。ただし、当然文明の利器たとえばクレーンなど利用した作業だったので、苦勞に雲泥の差があった。

甲骨堆積の模型

翌日から、歴史語言研究所の広間で、室内発掘が始まることになった。ただ、この堆積から亀甲版をはがす作業をする前に、石工職人を呼んで亀甲版堆積の複製を作らせることにした。そしてこの複製を南京の中央博物院(南京博物院の前身)に陳列する予定にしていた。ただ亀甲版堆積全体ではあまりにも大きすぎるので、東南の位置に当た

る四分の一の部分だけを実物大で作った。この大きさは高さ九十センチ、幅六十センチあり、断面に当たる面には隸書体で以下の文を刻した。

(図一〇・一一・一二)「甲骨堆積」の模型と刻文「甲骨坑層之二」

この模型もまもなく数奇な(不可解な)運命に遭う。(後述)



図10.「甲骨堆積」の模型(「甲骨坑層之二」)



図11.「甲骨堆積」模型の刻文(「甲骨坑層之二」)

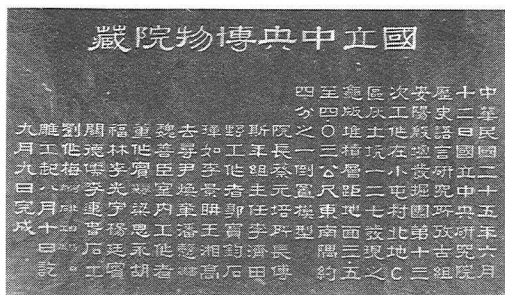


図12.「甲骨堆積」模型の刻文の拓本(「甲骨坑層之二」)

室内発掘の責任者は董作賓と胡厚宣で、実際に亀甲版をはがす作業を行った人は関徳儒、魏善臣、徐祿であった。(図八) 亀甲版を一層はがすたびにそれに整理番号をつけて、それを書いた紙を亀甲版に貼り付け、一版ごとに紙箱に入れて保管した。それと同時に、それがあつた位置を図を描いて明示した。こういう作業をずっと続けて、一九三六年十月十五日に完了した。室内発掘は三ヶ月余を要した。この作業の過程で、亀甲版はもともといてねいに積み重ねて保存されたものではなく、非常に乱雑に投げ入れられたものであつたことが判明した。はがされた亀甲版はみなきれいな水や「火酒」の中に浸して土を洗い落とした。また割れて断片となっている亀甲版については初歩的綴合の作業を行い、ニカワを使ってしっかり接合した。次は、整理登録し、写真撮影して、拓本を採る作業である。

第二の苦難

このあとすぐ、まったく思わぬ事態が起こつた。苦難の第二幕である。

一九三七年七月七日、盧溝橋事変が起こつた。八月十三日、日本軍は上海を爆撃した。十五日、ついに南京も爆撃を受けた。そこで史語所は、甲骨をあわただしく箱に詰めて避難の準備を急いだ。

長沙

一九三七年八月、史語所はまず湖南省長沙に避難した。北京大学、清華大学、南開大学もここに疎開して合同で長沙臨時大学を成立させた。史語所は長沙臨時大学と一緒に聖經学校を借りて活動した。ところが十二月になるとここも危なくなつた。史語所も長沙臨時大学もさらに奥地の雲南省昆明に疎開することになった。甲骨は桂林を経由して昆明に着いた。(一説では、南昌、重慶を経由して昆明に着いた)

昆明

一九三八年春。最初、城内に居処を定めた。第一、二、四組は拓東路に、第三組(考古組)は青雲街甍花巷に住んだ。

ところがまもなく城内（市街地）は日本軍の爆撃を頻繁に受けるようになった。連合国側の支援を阻止する作戦の環で、日本軍が爆撃を行った。そこで北方郊外の龍泉鎮に移った。一九三八年秋。北京大学、清華大学、南開大学三校合同の長沙臨時大学は昆明に移ってここで西南聯合大学となった。

ここで生活はやつと安定した。そこで高去尋と胡厚宣は整理登録の仕事を進めた。南京で、甲骨を保存するために使った紙箱はこの不幸な状況の間に湿って腐ってしまつて、役に立たなくなつた。上の箱の亀甲版が下の亀甲版と一緒に becoming いた例さえあつた。整理登録の仕事は廊下を仕切つた小部屋の中で急いで行われた。亀甲版の割れた断片を綴合するにはそれだけの場所も時間もなかつた。整理登録が済んだ甲骨は新しい箱に入れて保管した。一九四〇年の終わりに近づいたころにこの仕事は完了した。

静かな生活ができたのでここにずっと居るつもりだったが、まもなく日本軍はビルマ雲南方面に対する爆撃を強化した。もはやここも安全な地ではなくなつた。やむなく、さらに西の四川省に疎開しなければならなくなつた。昆明は、連合国側の中国に対する補給路の中継地として重要な役割を果たしていた。

四川省南溪李莊

一九四〇年暮れ、宜賓県李莊に着いた。一九四一年の初め、甲骨を箱から取り出して拓本を採る作業を本格的に開始した。これらの拓本は後に董作賓主編で『殷虛文字乙編』上中下の三冊として出版された。（一九四八〜一九五三年）第十三次発掘で出土した甲骨はその第1片から第8688片までである。そのうち、一二七坑のものは、亀甲は第487片・第8467片、第8532片・第8637片、獸骨は第8663片・第8673片である。刻字の無い甲骨は、これの倍以上ある。（魏慈徳 上冊38頁39頁）

考古組は戲樓院を借りて仕事をした。部屋は大小合わせても十間に満たなかった。資料を入れると、人が作業をする場は非常に狭かった。拓本の場合は小さい部屋だけだった。三人が作業するのがやっとだった。別に場所を探して綴合の作業をするなど到底無理な状況だった。結局、分かれている断片はたいいていそのまま編輯して、出版の準備を進めた。まもなく中国は抗日戦に勝利したので、中央研究院も南京に帰ることになった。

第三の苦難

一九四六年の暮れに南京に帰り、考古組は史語所の二階で仕事することになった。一九四七年春、以前にくらべずずっとよくなった環境の中で出版に向けて作業を開始した。一九四八年十月、『殷虚文字乙編』上輯はついに出版された。こうして作業が順調に進行していたとき、国民党と共産党による内戦はついに最終局面を迎えた。国民党政府は台湾へ移動することになった。受難の第三幕である。

史語所はすべての活動を停止し、甲骨はまた箱に入れられて台湾まで輸送された。こういうさなか、一九四九年三月に乙編の中輯は出版された。

一九四九年初め、台湾に移ってきて、最初、楊梅鉄路局の倉庫を借りて保管した。またこの一部を研究室として利用し、編輯の作業を再開した。こうして一九五三年十二月に下輯が出版された。これによって第十三次から十五次までに発掘された甲骨はすべて出版されたことになる。一九五四年春、楊梅から台北南港の現在の中央研究院に移って来た。

以上述べたような状況だったので、YH一二七坑甲骨について、綴合の作業がほとんどなされなかった。そこで、張秉権がここで綴合の作業を進め、その成果を『殷虚文字内編』として上輯中輯下輯を一九五七年から順次出版した。

一二七坑甲骨堆積模型のその後

前に述べたように、南京で甲骨堆積全形の四分の一に当たる部分について模型を作った。ところが一九三七年に南京から疎開する際に、この模型は運搬がたいへんなので、地中に埋めて隠しておいた。ところが一九四六年に南京にもどってきて、この模型を探したが見つからなかった。この模型の行方について董作賓は一つの見解を述べたことがあった。

一九五五年、董作賓は京都大学人文科学研究所で「殷墟の発掘」という題で講演した。その中で彼はこう述べた。

安陽殷墟の十三次発掘の時、発見された亀甲版は泥土と一緒に「かたまり」となっていた。重さは数トンあったであろう。当時我々は、この大変重い「かたまり」をそのまま南京に運んだ。そして南京でこの「かたまり」の模型を作った。まもなく七七事変（一九三七年）が勃発した。我々はこの模型を南京に埋め、出土した甲骨そのものは、中央研究院とともに後方に移動した……

戦争が終わって、我々は四川から南京にもどって来た。さつそくあの模型を埋めたあたりを掘って探したが、どこへいったのかみつからなかった。聞くところによると、模型はいま日本にあるそうです。

（彭沢周「彦堂先生在日本」『董作賓先生逝世三週年紀念集』）
ところで北京の歴史博物館（最近、国家博物館と改称した）はいま甲骨堆積の模型を所蔵している。（図一三三、甲骨堆積模型の写真、曲英傑撮影）

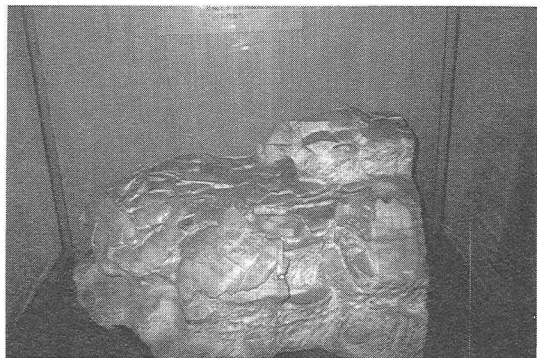


図13. 中国歴史博物館蔵「甲骨堆積の模型」の写真
（曲英傑撮影）

近年大陸で出ている著書では、この模型は戦前に中央研究院が作ったものではなく、戦後に作られたもので、戦前につくられたものは所在不明である、と書いている。

徐自學「甲骨文与南京」『甲骨天地』創刊号

朱彥民『巫史重光・殷墟甲骨發現記』

ところが石璋如は「甲骨坑層之二」でこう書いている（上冊89頁）。

この模型は非常に重かったので二十六年（一九三七年）、抗日戦が激しくなったとき、石虎の複製品とともに南京に埋めて置いていくことにした。石虎などの模型は山西路の某宅に置いた。甲骨の模型の方は水西門にある銀行の倉庫に運び、その裏庭に埋めた。三十四年（一九四五年）に勝利して首都南京にもどってきた。さっそく石虎模型や他の標本を探したが、みな存在しなかった。また甲骨模型を埋めたところには一棟の家が建っていた。この辺の人に聞いてみたが、模型については知らないという。大変惜しいことだと思った。

一九八九年九月に蔡哲茂先生が安陽に行つて「甲骨出土九十年記念會議」に参加した。その時彼は殷墟博物院の中にこの模型が陳列されているのを見た。そこでこの模型の出処を尋ねたところ、これは北京の歴史博物館にある模型の複製品だということであった。一九九一年初め、杜正勝先生が、李学申中女史が提供してくれたという模型の写真を渡してくれた。また後に高風女史がその模型に刻されている文を筆記してくれた。みな、中央研究院が作ったものと一致する。それがいったいどこからきたものか尋ねると、ただ、南京中央博物院から運んできた、と言つのみである。陳仲玉先生が北京でその模型を實際に観察したが、真偽を確定することはできなかった。そこでまた知人に頼んで調べてもらったところ次の事実が判明した。

一九五五年、南京水西門付近で一軒の民家を建てるときに土を掘った時に発見された。この模型はまもなく中国歴史文物陳列庁に展示された。一九五八年に北京の中国歴史博物館に移管された。この時までには、新たに複製品が作られたことはない。

これによって、北京・中国歴史博物館（現国家博物館）蔵の模型は、以前中央研究院が作った模型そのものであることが確定した。

筆者（成家）は、この二〇〇六年に南京で開催された国際会議で、宋鎮豪氏と蔡哲茂氏に聞いてみたが、両氏ともに石璋如と同意見であった。

以上述べた受難は、戦争によるものであった。しかし受難はこれだけに止まらなかった。

市場に流れた甲骨版との綴合

以下、主に宋鎮豪が二〇〇六年の国際会議で発表した「記国博所蔵甲骨及其与YH127坑有関の大亀六版」によって述べる。（参照 曾毅公「論甲骨綴合」『華学』第四輯）

YH127坑は盗掘を受けたことがない坑であることが確認されているから、ここにあった甲骨はすべて中央研究院の所蔵になったはずである。ところが奇妙な状況がある。奇妙な状況に最初に気付いた人は、今は亡き胡厚宣であった。胡氏は一九四五年に『甲骨六録』を出版し、この中で于省吾が一九四〇年に出版した『双劍詒古器物図録』に収録されている三版の亀甲版（下33.1正、下32.1正、下32.2正）を取り上げ、これら三版はYH127坑亀甲版と著しく類似している、と指摘した。

一、時代はともに武丁時代に属する。

- 二. 大きさもほぼ同じで二十〜二十八センチの間にある。
- 三. 文例も同じで、上の卜辞から下の卜辞へ順に読んでいく。
- 四. 亀甲版の全形がそのまま残っている。
- 五. 契刻と卜兆（ひび割れ）がある。
- 六. 卜序が整然としている。
- 七. 占卜内容が同じである。
- 八. 互いに綴合する。

胡氏はこの状況に驚き、次のように述べた。『これら三版は中央研究院第十三次発掘のものと関連がある。少なくとも同時代同類のものである。あるいは同坑から出土した中央研究院の遺したものではなからうか。』

『甲骨六録』を出版した一九四五年に中国は抗日戦に勝利したので、胡氏は北京に来て、民間に流れた甲骨を調査し、ときには購入もした。この時、胡氏は収蔵家・李氏から四四八片を購入した。この中にほとんど欠けるところのない亀甲版が三版あった。これらには卜兆（ひび割れ）と刻辞の他に背面には朱書による「甲橋刻辞」も見られた。胡氏はこれらもYH一二七坑出土と同時のものではないかと疑った。

一九四七年に胡氏はこれら三版と上記の于省吾蔵三版とさらに于氏蔵のもう一版を加えて計七版の亀甲版を「戦後殷虚出土的新大亀七版」という題で『中央日報・文物周刊』（上海発行）に連載して紹介した。彼はこの中で明確に指摘した。

北平（北京）で得た武丁時期の大亀甲版は、その特徴はまさに中央研究院第十三次発掘で発掘した一坑のものと同

全に同じである。

YH一二七坑出土のものの特徴が完全に一致するところの、民間に流れた亀甲版はこの七版に止まらなかった。

胡氏がまた北京・慶雲堂で購入した、「四方風名」が記された「半分の亀甲版」はまさにYH一二七坑出土のものと同綴合する。(胡厚宣『五十年甲骨文發現的総結』一九五一年) 胡氏はさらに一九五五年に『甲骨続存・序』の中でこう述べた。その下編388正、389反と下編442正、443反これらの二版の亀甲版は一二七坑亀甲版と、作風相同であるから、同時期に卜したものである。あるいは同坑から出たものではないかとも思われる。

この奇妙な状況については曾毅公や台湾の嚴一萍も着目した。曾氏、嚴氏もやはり胡氏と同じく、YH一二七坑から出たものに間違いないと考えた。嚴氏は、どのようにして「遺失」したのか分らない、と記し、また、胡氏が題を「戦後殷虚出土」としたのは事実と合わないから、「戦前第十三次発掘一二七坑出土の大亀十版」とすべきだと述べた。

実は、YH一二七坑亀甲版と同綴合する亀甲版は、胡氏が指摘した十版以外にも存在する。(参照 曾毅公「論甲骨綴合」『華学』第四輯)

一九五八年に文化省文物局から北京図書館に移管された亀甲断片が七三片ある。(もとは個人が所蔵していた) これら七三片の亀甲断片はみな亀甲面のすじや色具合など同じであるから、一つの坑から出たものであることは間違いない。実際、これらと史語所蔵の甲骨と同綴合する例がいくつかある。

- ① 北京図書館蔵第5252号断片は、YH一二七坑の「四方風」卜辞亀甲版乙編二二六と同綴合する。『甲骨文合集』14295はその綴合された甲骨の拓本である。



図14. 「乙編」4810は北京図書館の三片
第5251号、5232号、5237号（合集22491）と綴合する。
（魏慈徳、上冊72頁・図14. 青銅器「鼎」の象形の字形が見える。）

② 北図の第5213号、5214号など十片は丙編六二七号大亀と綴合する。綴合された拓本は「合集」10171である。

③ また第5251号、5232号、5237号（合集22491）これら三片は「乙編」4810と綴合する。（図

一四・魏慈徳、上冊72頁・図14）

乙編4810（合補6925）+合集22491（北図5237）+北図5251+5232

④ また、いま台湾の某收藏家が所蔵している亀甲版と綴合する例もある。

乙編5278+5987+6001+6014+京津396Ⅱ合集12973

これに、乙編補遺229+5318+台湾某收藏家蔵品。

魏慈徳、上冊69頁には、さらに「乙621」と綴合された、とある。その92頁に綴合された図が掲載されている（図12）。しかしこの図のどこにも、「乙621」は見えない。かん違いであろうか？

⑤ 一二七坑出土ではないが似た状況がある。

かつて黄濬通古齋が『鄴中片羽』に著録した甲骨（いま北京師範大学蔵）の中に、第十五次発掘で出土した甲骨と綴合する例がある。その第三集下34・6は「乙編」8713と綴合して一版の大亀となる（「合集」22249）。「乙編」8713は、第十五次発掘で出土した甲骨。

魏慈徳はその博士論文（すなわち『殷墟YH127坑甲骨卜辞研究』）の中で「遺失」と綴合について詳しく述べている。

張惟捷は甲骨の受難を概括してこう述べた。

日本軍の攻撃から逃れて、昆明から四川省に向かう過程でも混乱と損傷から免れることはできなかった。特に湿気とそれによって生じるカビ、および運搬の時の激しい振動が甲骨や拓本に相当の損傷を与えた。またあわただしい生活の中で整理の仕事をを行ったので、混乱があった。例えば張惟捷が丙編二八四について綴合の作業を行ったとき、出土を示す整理番号は次ぎのようになっていたことが分かった。

13.0.670 (乙編507)、13.0.1098 (乙編補遺306)そして13.0.11603 (乙編5140)

最初の、13[〃]は、第十三次発掘であることを示し、つぎの、0[〃]は、亀甲であることを示している。3番目の番号は、甲骨のかたまりから取ったとき、それぞれに順番に付けた番号である。互いに近くにあった甲骨は、当然それらの番号も互いに近い数になるはずである。ところがこの例では、10000以上離れている。従って、編号整理(登録)をした時はすでに、割れてそれぞれ別の箱に入っていたのである。

張政烺は當時を回想してこう述べている。

一二七坑出土の甲骨堆積(かたまり)に対して、史語所内で一枚一枚はがしていく作業を行ったが、最初二時間たらずの間に四千余片を取り出した。その場ですぐ編号整理や図面を描く作業はもちろん十分ではなかった。取り出す作業をした人は、取り出した甲骨を紙箱にためておいて、あとで編号作業を行うこともあった。だから間違いが起るのを防ぐことは不可能だった。抗日戦の時期、史語所は大移動を余儀なくされていた。甲骨の保護はなかなか思い通りにはいかなかった。私(張政烺)は昆明に着いたとき、もと付けてあった編号はがれ落ちていたものもあった。また一枚の甲骨が割れて数枚に分かれてしまったものもあった。ひどい例では、編号がもともと付けられていないものさえあって、昆明でそれを整理する作業を行った。これらの客観的実状は、科学的整理や出土甲骨に対する細かい研究を進める際に困難をもたらした。『新學術之路』下冊五三八頁)

長距離にわたる運搬の過程で、自動車や手押し車、貨車に積んでまた下ろすという作業が何度もあった。綿でいねいに包まれてあったにしても、損傷は小さくはなかった。石璋如はこう回想した。

雲南省龍頭で箱詰めし、貨車に積み込み、四川省に向かった。その貨車は深山峻谷の中を通るとき、史語所の物品を積んでいる一輛の貨車が河谷に落ちたこともあった。数十の木箱は四方に散乱した。李濟はあわてて石璋如に連絡して、貨車内の木箱の状況を点検させた。あとで分かったのだが、落下散乱した木箱に入っていたものは、古代文書の類だったので、破壊損傷の心配はなかった。こういう状況を知ると、甲骨のような壊れやすい文物が、移動運搬の過程でそうとう傷んだのもっとも思われる。

抗日戦に勝利して、一二七坑の甲骨は他の古物とともに南京に帰ってきた。やっと安全に落ち着いて作業や研究ができると思われた。四川省李莊から輸送運搬して南京にもどってくる過程では、以前のように飛行機の爆撃を心配する必要はなかった。

ところが良いことは、往々にして長くは続かない。つまり、国共内戦が激しくなり、史語所が所蔵する古物も、国府の撤退にともなって、台湾に運ばなくてはならなくなった。輸送は二回に分けて行われた。最初は一九四八年十二月二十二日、海軍の軍艦によって、二回目は一九四九年一月六日、招商局の輸送船を使って運ばれた。第一陣は、李濟、李光宇が責任者となり、一百二十箱が、第二陣は董同穌、周法高、王叔岷が責任者となり八百五十六箱が運ばれた。これらと共に、故宫や中央博物院等が蔵する文物も一緒に、南京を離れて台湾に渡った。

このとき故宮文物の輸送に当たった那志良の回想によれば、船による輸送でも受難を免れることはなかった。積荷は船内ですっかり固定されてはいなかった。だから船が大波で大きく揺れたとき、積荷は左右に激しく移動した。箱が床をすべる音、またぶつかる音は実にすさまじく、たえられないほどだった。

慌しい状況で急いで荷を積み込んだためとはいえ、ここでまたまた甲骨に損傷を与える事態を招いたのは、研究者にとつてはまさに「甲骨の悲しむべき運命」であったと言わざるを得ない。ただ台湾では最初、桃園楊梅鎮に保管され、一九五四年に南港の今の史語所に移され、いま安全良好な環境で、研究者に利用されるようになっていた。（張惟捷、六頁・九頁）

張惟捷の記述を引用したついでに、ここで彼の著作の中の気になるところを指摘しておく。「殷墟YH127坑竇組甲骨新研』の巻頭彩色図版二は、林宏明と共同で綴合した亀甲版のカラー写真である。その説明によれば、次ぎの五片が綴合されたものである。その224頁に見える解説も同じ。

乙編3208+3209+3210+3214+7680

しかし実際にこれら五片の拓本をくつつけてみると、甲骨の写真と合わないところがある。写真の亀甲版上部左半は、拓本に見えない。写真をみると、その部分はいま史語所が所蔵している亀甲版に間違いのないようだ。

YH一二七坑出土卜辞の特徴

大部分は王朝卜辞である。全体的には、基本的には巫師名を持つので、某組という分類法が適用できる。多くは武丁期の卜辞である。その中で、有名な賓組卜辞が非常に多い。またみごとに亀甲版全形も非常に多かった。亀甲版の全形を保つもの三百二十版、半形を保つもの五百四十版もあった。亀甲版上に毛筆で書かれた卜辞も見られた。墨書もあれば、朱書もある。

主な内容——卜辞例——

賓組卜辞

一二七坑甲骨は、賓組に属する卜辞が圧倒的に多い。そこでこれらの賓組卜辞だけを研究対象とした专著が最近世に出た。それが張惟捷著『殷墟YH127坑賓組甲骨新研』である。次いで、多子族卜辞（子組卜辞）が多い。王族卜辞（自組卜辞）も少し含まれている。

一、戦争（一） 図一五（丙編一）

壬子49卜争凶（鼎↓當）、自今日我「災」𠄎。

鼎（當）自五日我弗其「災」𠄎。

癸丑50卜争鼎（當）、自今至于丁巳54我「災」𠄎。

王占曰、丁巳我母其「災」、于来甲子01「災」、旬有一

日癸亥60、車弗「災」、之

夜「𠄎」、甲子01允災。（図一五）

癸丑50卜争鼎（當）自今至于丁巳54我弗其「災」𠄎。



図15. 卜辞例 戦争卜辞（丙編一）

「𠄎」…商国と敵対する地名あるいは部族名である。丙編釈文は「𠄎」を宛てている。

「車」…文例から判断すれば、地名あるいは部族名であろう。

「𠄎」については、裘錫圭が「向」を宛てて以来、これに従う人が多い。たとえば魏慈徳、張惟捷など。しかし私が以前論証したように裘説は成立しない。（成家「甲骨文の『𠄎』と超新星記録」 祭儀名の「禋」を宛てるべきである。裘錫圭は中国ではさうとう信頼されているようだ。信頼というよりも宗教的崇拜に近いという印象を受ける。





















	⑪甲編 2907		①乙編 146
	⑫甲編 2908		②乙編 8697
	⑬合集 33697		③乙編 8759
	⑭拾掇三 005		④乙編 8779
	⑮拾掇三 016		⑤乙編 8816
	⑯拾掇三 438		⑥乙編 8854
	⑰拾掇三 838		⑦乙編 9073
	⑱拾掇三 861		⑧京大人 3105
	⑲拾掇二 188		⑨甲編 712
	⑳拾掇二 404		⑩甲編 2337

図16. ト辞序辞の中の「鼎」字
-多様な字形。
(季刊『修美』第一一八号)

しかし私が何度も指摘したように、わりと次元の低い間違いが目立つ。若い研究者は、権威や名声にとらわれることなく、虚心に自分の頭で考察する訓練が必要である。

「𠩺」に貞を宛てるのが定説になっている。しかし「𠩺」に貞を宛てるのが定説になった理由は、発見事情の影響が大きい。ト辞序辞に使われるこの字はもと鼎字の略体形の一つである。しだいに分かってくるのだが、鼎字は、青銅器の鼎に忠実な象形から、大胆に簡略化した「𠩺」まで、さまざまな字形が見つかっている。ただ、戦前に発見されたト辞の中で、特に賓組ト辞の中で「𠩺」この字形が非常に目立ったので、貞を宛てる定説がはやばやと確立した。ところが、よく調べると、「𠩺」は鼎字の多様な字形の一つに過ぎないことがよく分かる。(図一六参照。季刊『修美』第118号。また図一四にも青銅器の象形に作る字形が見える。)

図一六。(および図一四) ト辞序辞の中の「鼎」字・多様な字形

そして近年、青銅器銘文と戦国竹簡および近出甲骨文で、貞字の字形の由来が明らかになった。もと鼎字の上にも「ト」字を付ける字形があった。のち戦国時代になって、鼎字の脚の部分が繁雑なので、簡略に書かれるようになった。そ

してついに脚二本だけの字形が出現した。それがすなわち貞字である。だから先秦文献にみえる「貞」字は、その当時はみな「鼎+ト」の字形であったのである。いわゆる「鼎問」の意味など無い。卜辞の鼎字は、「當」つまり「担当する」の意味である。「當」字の出現はこれよりかなり遅く、いま知られている資料を見るかぎり、秦朝期の簡牘文字（里耶秦簡、睡虎地秦簡）が最も古い。

（成家「甲骨文」の釈字と意味・凶は鼎字の略体形・貞字の初形は〈ト+鼎〉」。成家「甲骨字の近刊紹介」「常耀華著《殷墟甲骨非王卜辞研究》」）

以上の認識を踏まえて、癸丑に始まる卜辞を訳すところなる。

癸丑の日、占トを行い争（巫師の名）が占トを担当する。

巫師争が宣言した・今日から丁巳の日まで我は冑を攻める。

王が、ひび割れを見て判断を下した。丁巳の日、我は攻めないほうがよい。来る甲子の日にすべきである。十日と一日たった癸亥の日、車は攻めてこない。

その夜（癸亥の夜あるいは夕方）、禋という祭儀を行った。翌日（甲子）が無事息災であるように祈る祭儀である。ところが甲子の日、実際は、攻めてきた。

(2) 巴方 図一七・巴族との戦争

図一七 a. (丙編二六)

鼎(當) 王従「沚馘」伐巴。(図一七 a)

王勿從「沚戩」伐巴。

図一七b. (丙編二七六)

辛卯卜賓鼎(當)、「沚戩」啓、巴、王惠之從。五月。

辛卯卜賓鼎(當)、「沚戩」啓、巴、王勿之從。

「沚戩」.. 部族または將軍の名。当時の重要人物である。

惠.. 語氣詞。ここでは王の意志を強調している。

啓.. 卜辞によく見る語である。しかし意味はいくつかあ

る。ここでは、敵情を探って明らかにする、の意味

であろう。

巴.. 当時、巴族は湖北省湖南省河南省などひろい地域にわたって漁労と交易活動に従事していた。商国に青銅器を

供給したのも巴族であった。ただしこの卜辞の「巴」はそのうちの特定の集団を指している。おそらく河南省

南陽あたりに存在した原始国家であろう。商国にとって手ごわい敵であった。(成家「三星堆青銅器と巴族」『月

刊しにか』二〇〇一年十二月号) 辛卯で始まる卜辞を訳すところなる。

辛卯の日、占卜する。賓(巫師の名)が担当する。「沚戩」が巴国の軍事状況を探る。王はこれに従う(王はそうした方がよいと思った)。占卜したのは五月のことである。

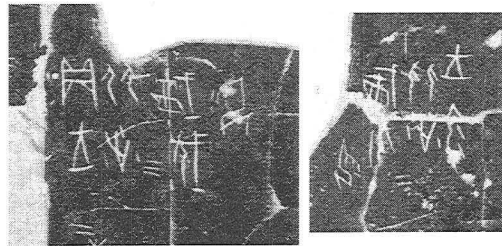


図17a. 卜辞例 戦争卜辞(巴国、巴族との戦争) 丙編二六



図17b. 卜辞例 戦争卜辞(巴国、巴族との戦争) 丙編二七六

二 祭祀

(1) 帝「天」

中国人はたいいてい帝についての認識が間違っている。

丙編六七

戊申卜争鼎(當)、帝其降我曠。一月。

戊申卜争鼎(當)、帝不我降曠。

帝・商族の独特の宗教観念。中国の文献中には見えない概念なので、中国人には理解が困難なようだ。(張惟捷

三六八頁) 伊藤道治はかつてその意味を的確に示した。

帝は天の神と考えられているが、どのような姿形をしたものであるかはよくつかめない。中略

殷の人びとは、帝というものは、天上に住む姿のない神と考えていたのである。したがって、帝には祭りを
行う習慣はなかったらしい。甲骨文には、帝に対して祭祀をすることを卜ったと考えられるものがないのであ
る。(伊藤『古代中国・原始・殷周・春秋戦国』一五二頁)

(神々の中で) 最高の位置におかれていたのが帝であり、おそらくこれは天にいと考えていたようである。
そしてこれは、戦争などを通じて人間にその力をふるうと同時に、旱(ひでり)・雨や稔りなどの自然現象に
も絶大な力をもっていたが、それは一方的に帝から降されるものであり、人間が祭祀によってこの帝の意向に
影響を与えることはできないものであった。(伊藤一六〇頁)

一月…この卜辞における「一月」の意味するところは重大である。筆者（成家）が証明したように、商代から西周時代まで使われていた暦は「大火暦」であった。（成家「大火暦」『中国古代の天文と暦』）当時の「一月」は今の初春の時期に当たる。つまり農作業を始める時期であるから、雨が降らないと大変なことになる。それを心配する卜辞である。この卜辞はこういう意味である。

戊申の日に占卜する。争が担当する。帝は我に「ひでり」をもたらず。一月の占卜である。戊申の日に占卜し、争が担当する。帝は我に「ひでり」をもたらない。

（このように肯定文と否定文を宣言したのち、ひび割れを作って、それを見て判断をくだすのである。）

（2）河神に対する祭祀

癸卯卜穀（鼎）、燎河一牛、侑三羌、劉三牛。

癸卯卜穀（鼎）、侑于河三羌、劉三牛、燎一牛。

（林宏明、綴合〔350〕。丙編一二四＋乙編補遺4919）

燎、侑、劉、これらはみな犠牲を処理する仕方の名称である。燎は火を使う祭儀である。劉は、甲骨文の字形はたまたま干支の「卯」と同じであるが、たがいに由来も違うし音も異なる。劉はもと、刀を使って肉を切り裂く意味であり、音は「リュウ」である。劉字や柳字の音はこれに由来する。羌字は、羊の下に「人」が付いた字形であり、遊牧民を指すと思われる。捕えられて、犠牲に供されたのであろう。

この卜辞は、河神に対して、燎の祭儀で牛一頭、侑の祭儀で羌三人、劉の祭儀で牛三頭を捧げている。そうとう豪華なささげものと言える。

多子族卜辞（子組卜辞） 図一八

乙丑、子卜鼎（當）、自今四日、有来。

乙丑、子卜鼎（當）、庚、有来。

乙丑、子卜鼎（當）、翌日、有来。

乙丑、子卜鼎（當）、今日、有来。

丙寅、子卜鼎（當）、庚、有事。

癸酉、こ卜鼎（當）、至蜀亡禍。（丙編六一二）

蜀・四川省の蜀ではない。

「排譜」の問題点

魏慈徳も張惟捷も彼らの著作の中で、排譜の作成に相当精力を注いでいる。排譜は、卜辞中で同一事件に関連するものがたくさんある場合、それらを干支や月名（月名が記される卜辞は極めて少ない）に基づいて、卜辞を時間順に並べる仕事である。これは一見、合理的で信頼度が高い仕事のように思われる。実際彼らはそう信じて排譜を作成した。ところが、たとえば大きな戦争なら、何年にもわたって行われたであろう。そうすると、干支は六十日で循環するから、時間的にどこに置いか確定は困難である。いみじくも張氏はその著作の中でこの問題を認めざるを得なかった。（張惟捷、123頁、224頁）卜辞内容と月名が共通する二枚の甲骨上の卜辞について、干支を調べると、同一年に属する卜辞でないことは明らかである。この例では、たまたま月名が共通する卜辞だったから、こういうこと



図18. 卜辞例
多子族卜辞（子組卜辞）
（丙編六一二）

が分かったただけである。実際は月名が刻される卜辞は例外と言ってよいくらい少ない。さらに、同一年に属さない卜辞の干支でも、月名と干支の関係がうまく合う可能性は十分ある。そうすると、同一年に属するものかどうか判断は困難である。

また別の問題点もある。そもそも卜辞は、戦争や祭祀を記録するために刻したものではない。占卜したもののうち、ごく一部について何らかの必要があつて刻したものである。したがつて、たいいていの場合、甲骨上に刻されることはなかつた。ただしすべての占卜について、毛筆による記録はなされた。甲骨上の刻辞は、いわばごくわずかの抜粋に過ぎないのである。

排譜の作成に払った労力には敬意を表すべきだが、有効性や信頼度がどの程度なのか、慎重に考察しなくてはならない。

中国人甲骨文研究者の特徴

卜辞ばかりいじつて、卜辞の外、歴史や商王朝の社会構造の探求に進むことは非常に少ない。貝塚茂樹の多子族卜辞の研究は、金文まで視野に入れて、商王朝の王朝内部の構造まで及んだ。しかし中国人の子組研究は、甲骨文の中に止まつていて、広がりを見せない。

いわゆる「巴方」についても、私は当時の巴族の歴史と結びつけて、関連する卜辞を考察した。こういう例を見ても、中国はやはり「文字の国」だなどという印象を強くする。武丁期の甲骨文を字形にもとづいて細かく分類するとか、排譜研究などにも、こういう特徴が非常によく表れている。歴史や王朝構造の探求にあまり関心を持たないのは、私には不思議に思われる。

文献

- 李濟著、国分直一訳『安陽発掘』新日本教育図書 下関市一九八二（李濟の英文原稿 Anyang Excavation から翻訳）
紀念殷墟甲骨文YH127坑南京室内発掘70周年學術研討会（二〇〇六年一〇月）
「紀念殷墟甲骨文YH127坑南京室内発掘70周年國際學術會議」
宋鎮豪主編『紀念殷墟甲骨文YH127甲骨坑南京室内発掘70周年論文集』文物出版社二〇〇八
宋鎮豪「記国博所藏甲骨及其与YH一二七坑有関の大亀六版」
成家徹郎「日本人第一篇有関甲骨文的論作・林泰輔著《中国古代史上的文字源流》」
宋鎮豪「紀念YH一二七坑甲骨南京室内発掘70周年學術研討会小結」『甲骨天地』二〇〇六年第三期 江蘇省甲骨文学会
李宗焜『當甲骨遇上考古・導覽YH127坑・』中央研究院歷史語言研究所 台北二〇〇六
上記書の和訳
李宗焜著、高田真菊訳『甲骨学史の奇跡・殷墟YH127坑の発掘と出土甲骨』藝文書院 京都二〇〇八
『揖芬集・張政烺先生九十華誕紀念文集』社会科学文献出版社二〇〇二
石璋如「与張政烺先生談対日抗戰期間史語所の図書館」（史語所の昆明時代）
劉一曼「論殷墟甲骨的埋藏狀況及相關問題」

成家徹郎「甲骨学・回顧と展望・(上) 安陽YH一二七坑甲骨の受難」『東方』314号 二〇〇七年四月号 東方書店

成家徹郎「甲骨文」〇〇と超新星記録」『人文科学』第十号 大東文化大学人文科学研究所二〇〇五年三月

成家徹郎「甲骨学の近刊紹介」常耀華著《殷墟甲骨非王卜辞研究》

『人文科学』第十六号 大東文化大学人文科学研究所二〇一一年三月

成家徹郎「甲骨文」𠄎の积字と意味・𠄎は鼎字の略体形・貞字の初形は(卜+鼎)・」『古代漢字の研究』

大東文化大学人文科学研究所二〇〇五

成家徹郎「貝塚茂樹 多子族卜辞」の発見」『説文解字の研究・前編』大東文化大学人文科学研究所二〇一〇

成家徹郎「王国維 二重證據法」と商代の暦」『人文科学』第十八号 大東文化大学人文科学研究所二〇一三

成家徹郎「殷代の暦」問題を抱える新説が目立つ」『東方』二〇一一年三月号 東方書店

成家徹郎「甲骨文「鼎」字の多様な字形」『説文解字の研究』45 季刊『修美』第118号 修美社二〇一四

成家徹郎「三星堆青銅器と巴族」『月刊しにか』二〇一一年十二月号 大修館書店

成家徹郎「大火暦」『中国古代の天文と暦』大東文化大学人文科学研究所二〇〇六

『甲骨天地』二〇〇六年第二期(紀念YH1277甲骨坑南京室内発掘70周年專輯)

石璋如「殷墟一二七甲骨坑的発現与発掘」

胡厚宣「殷墟一二七坑甲骨文的発現和特点」(摘要)

蔡哲茂「YH一二七坑的発現对甲骨学研究的意義」(摘要)

劉一曼「小屯北YH一二七坑与花東H3坑之比較」(摘要)

趙誠「YH一二七坑和花園莊東甲骨」(摘要)

魏慈德「談一二七坑甲骨文其它著錄甲骨骨相綴相合的現象」(摘要)

郭勝強「參加殷墟發掘的台灣學者」(摘要)

中央研究院歷史語言研究所七十周年紀念文集

『新學術之路』(全二冊) 中央研究院歷史語言研究所 台北一九九八

張政烺「我在史語所的十年」(一二七坑甲骨)

石璋如「殷墟最近之重要發現、付論·小屯地層」『中國考古學報』第二冊

(即田野考古報告。國立中央研究院歷史語言研究所專刊之十三) 商務印書館 上海一九四七年三月

『中國考古學報』第四冊

(國立中央研究院歷史語言研究所專刊之十三) 商務印書館 上海一九六〇年十二月

董作賓「殷墟文字乙編序」、

石璋如「殷墟最近之重要發現、付論·小屯地層後記」

石璋如「遺址的發現與發掘·丁編·甲骨坑層之二」(十三次至十五次出土甲骨) 上下

中央研究院歷史語言研究所一九九二

胡厚宣『殷墟發掘』學習生活出版社 上海一九五五

- 胡厚宣「殷墟一二七坑甲骨文的發現和特点」『中国歴史博物館館刊』13・14期 一九八九年九月
- 胡厚宣「紀念殷墟甲骨文發現90周年、想到127坑」『文物天地』一九八九年六月 文物出版社一九八九年十二月
- 魏慈德「殷墟YH一二七坑甲骨卜辭研究」(博士論文) 二〇〇一
- 魏慈德「殷墟YH一二七坑甲骨卜辭研究」(全二冊)
- (中国語言文字研究輯刊第5冊6冊) 花木蘭文化出版 台湾新北市二〇一一
- 張惟捷「殷墟YH127坑賓組甲骨新研」萬卷樓 台北二〇一三
- 嚴一萍「関于、戦後殷墟出土の新大亀七版」『中国文字』第五十冊一九七三
- 嚴一萍「補述新大亀七版中的双劍診藏甲」『中国文字』第五十一冊 一九七四
- のち、これら二篇は下記論文集に収録された。
- 嚴一萍「甲骨古文字研究」第一輯 藝文印書館 台北一九七六
- 徐自学「甲骨文与南京·紀念殷墟甲骨文YH127坑在南京室内發掘70周年」
- 『甲骨天地』創刊号二〇〇六年一期 南京甲骨文学会
- 曾毅公「論甲骨綴合」(一九七三年ころの著作) 『華学』第四輯 紫禁城出版社二〇〇〇年八月
- 胡厚宣「戦後京津新獲甲骨集」(全四冊) 群聯出版社一九五四
- 林宏明「醉古集·甲骨的綴合與研究」萬卷樓 台北二〇一一

中国社会科学院考古研究所『殷墟的發現与研究』科学出版社一九九四

『董作賓先生逝世三周年紀念集』台北 該會一九六六

石璋如「董彥堂先生在昆明」、彭澤周「董彥堂先生在日本」

朱彥民『巫史重光·殷墟甲骨發現記』百花文芸出版社 天津二〇〇一

莊因『漂流的歲月(上) 故宮国宝南遷與我的成長』三民書局 台北二〇〇六

伊藤道治、貝塚茂樹『古代中国·原始·殷周·春秋戰国』講談社學術文庫二〇〇〇